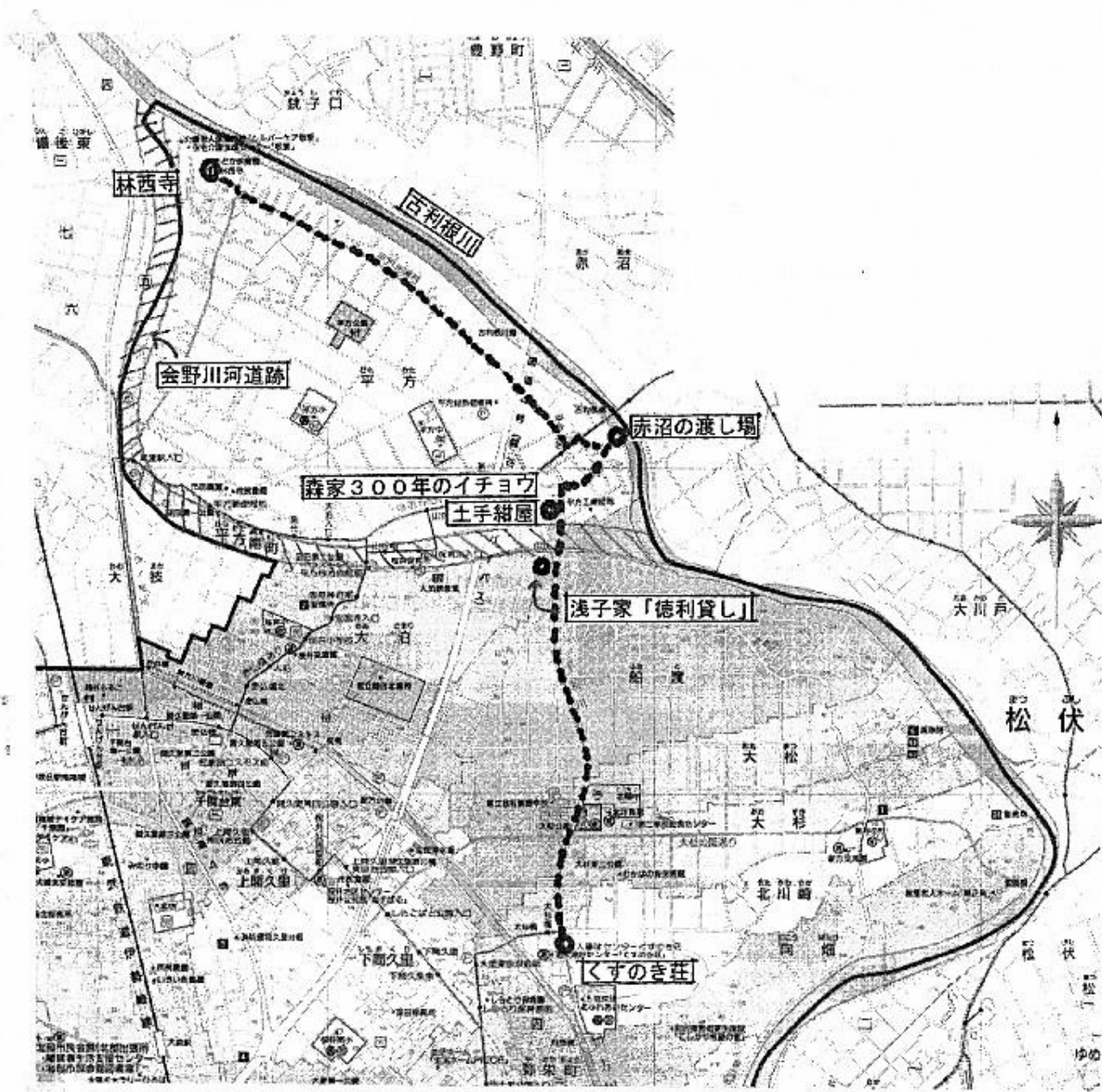


# 古利根川のほとりの寺院をたずねる(3)

—河岸のくらしと林西寺—

H19年11月7日

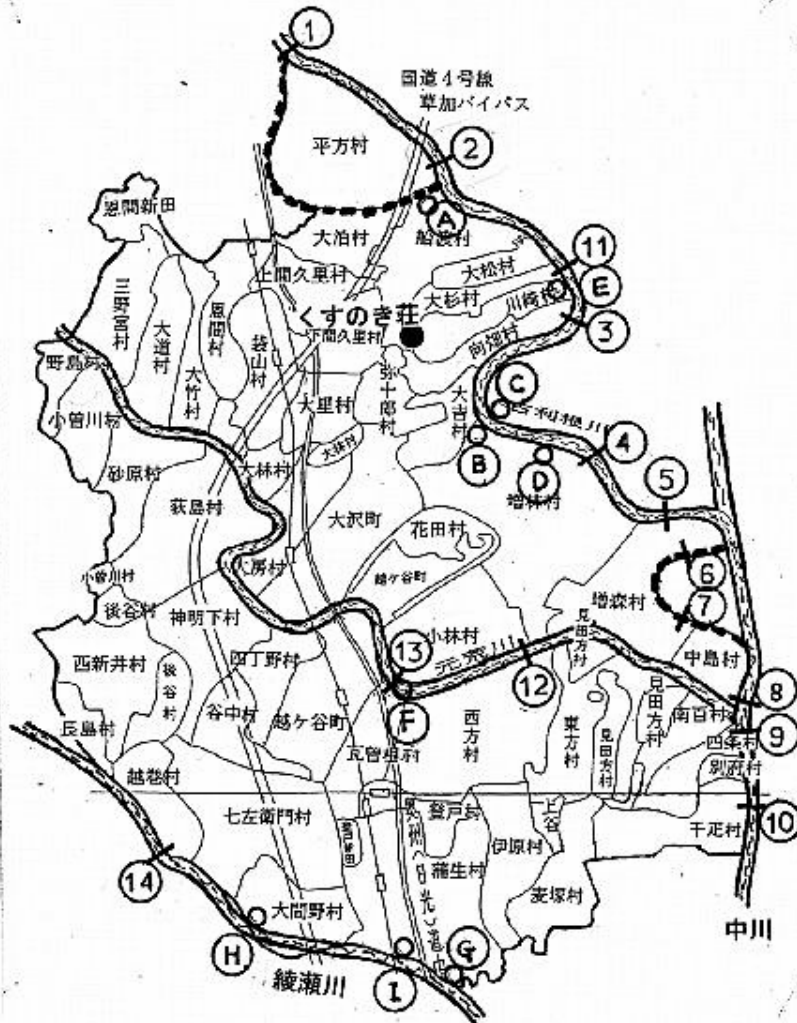
越谷市郷土研究会 篠原陸郎



## 越谷の川・渡し場・河岸場

### 越谷は水郷のまち

- 越谷は市境となる「綾瀬川」・「古利根川」・「中川」、そして水害から守る「新方川」・「逆川」、灌漑用水の「葛西用水」・「八条用水」・「谷古田用水」・「出羽堀」・「末田用水」・「新川」など市内を縦横に走っている。
- このように昔から川に囲まれ、人の生活は水との深いかかわりをもって営まれていた。



### 主な渡し場

### 主な河岸場

#### (古利根川)

- |                   |                     |                 |
|-------------------|---------------------|-----------------|
| 1. 地蔵坊渡し (備後—銚子口) | 10. 木売の渡し (千疋—木売)   | A. 徳利河岸 (会野川跡)  |
| 2. 赤沼の渡し (平方—赤沼)  | 11. 大杉の渡し (大杉—大川戸)  | B. 増林河岸 (古利根川)  |
| 3. 堂面の渡し (向畑—松伏)  | (元荒川)               | C. 民部河岸 ( " )   |
| 4. ばば渡し (増林—上赤岩)  | 12. 不動の渡し (西方—小林)   | D. 八幡河岸 ( " )   |
| 5. 馬渡し (増森—下赤岩)   | (瓦曾根溜井)             | E. 権現河岸 ( " )   |
| 6. さんこう渡し (増森—川藤) | 13. 団子屋の渡し (瓦曾根—小林) | F. 瓦曾根河岸 (元荒川)  |
| 7. せきの渡し (増森—須賀)  | (綾瀬川)               | G. 藤助河岸 (綾瀬川)   |
| 8. 中島の渡し (中島—吉川)  | 14. 中の島渡し (越巻—戸塚)   | H. よしずや河岸 ( " ) |
| 9. 南百の渡し (南百—吉川)  |                     | I. 半七河岸 ( " )   |

平方の昔の国と地名について

- 「新方庄」
  - ・ (中世迄) 下総国
  - ・ (室町上期以降) 武蔵国
  - ・ (範囲) 古利根川と元荒川の間
  
- 「新方領」
  - ・ 江戸時代より新方領と称す。
  - ・ 平方
    - ・ 武州埼玉郡新方領平方村
    - ・ 村高 1423石余り
    - ・ 戸数 240戸 (比較的大きな村)
    - ・ 土地の 67% → 畑  
30% → 田
  
- 「桜井村」
  - ・ 明治22年 平方・大泊・上間久里・下間久里・大里の5ヶ村が合併 → (現在) 桜井地区
- 「新方村」
  - ・ 明治22年 大吉・向畑・北川崎・大杉・大松・弥十郎・船渡の7ヶ村が合併 → 新方地区
  
- 「平方」
  - ・ 地名の由来 古利根川と会野川 (現在無い) に囲まれた輪中地帯は両川から運ばれた土砂によって、陸化が進み畑地となった。その後レンガの原料として多量の土が運ばれ、水田が多く占めるようになった。  
一説には平坦な陸地から平方と言う。
  - ・ 近辺の地名
    - ・ 北川崎・・・一説には、川崎とは川や海に突き出る所で、古利根川の屈曲した所から言う。
    - ・ 大杉・・・一説には、杉の木が生い茂っていた事から言う。
    - ・ 大松・・・一説には、松の木が生い茂っていた事から言う。
    - ・ 船渡・・・古くから船の渡し場があった事から言う。
    - ・ 大泊・・・(浄土宗安国寺の寺伝) によると、紀伊の国熊野大泊村の安国寺の住職であった誠譽尊故 (じょうよせんこ) という僧が、今から650年前頃にこの地を通りかかり、ここに安国寺を再建して住職になった。故郷の大泊の地名をとった。
  - ・ 会野川河道跡
    - ・ 利根川乱流時に古利根川から分流した川で、二つの川が合わさっていることから、名づけられた。
  - ・ 支配関係
    - ・ 徳川氏関東入国から幕末まで一貫して幕府領であった。  
また江戸時代は粕壁宿とより関係が深かった。

渡し場

- 渡し場とは
  - ・街道の渡河点
  - ・社寺への参詣のため



赤沼の渡し場跡

- 渡し場の推移
  - ・江戸時代は川に橋がほとんど少なかったため、人々は船で川を渡るしかなかった。これを「渡し舟」といった。
  - ・川筋にはたくさんの渡し場があり、特に街道筋には盛んな渡し場があった。その渡し場にはそれぞれ、土地の名前や人の名前がつけられていた。
  - ・明治・大正に入ると、街道筋には木橋が架けられるようになり、徐々に衰退していく。
  - ・それでも古利根川の「堂面の渡し」は昭和31年まで活躍した。
  - ・「木橋」が出来た頃には、橋を渡るのに銭をとった。  
明治の末頃、吉川の徳井惣次郎という人が「南百の渡し」(中川)を架け、「徳井橋」と呼び、銭6厘を取ったという。
- 「赤沼の渡し」
  - ・現在の野田岩槻線(古利根川橋)の脇には、昔から、この「赤沼の渡し」から利根川を渡り、赤沼(春日部市)へ行く唯一の往還道であった。
  - ・昭和の初め頃、この渡し場に木橋が架けられ、昭和30年頃、現在の新道が出来て新しい古利根川橋が架けられた。
  - ・川中に、昭和の初め頃架けられた木橋の杭が残っている。

河 岸 場

● 河岸場とは

- ・ 運送用の船が入りし、荷物の積み下ろしをするところ。
- ・ 江戸、明治にかけてもっぱら船での輸送に頼り、明治期になると「大八車」と言う荷車で農作物を積み、日光街道を通り千住の市場まで3時間かけて、運ぶ人もいたという。



藤助河岸

● 運送用の船は

- ・ 高瀬舟 ・ 全長9～27mと言う当時としては大型の長距離専用の帆船  
・ 米800～900俵を積めるものもあった。
- ・ てんま船 ・ 荷物専用のはしけ船で、甲板のない櫓やかいで運行する小型の船

● どんな荷物を

- ・ 出荷 ・ 米、むしろ、味噌、醤油、木綿など
- ・ 入荷 ・ 木材、酒、塩、砂糖、塩魚、乾物、水油、瀬戸物など

● 河岸の衰退

- ・ 中川（古利根川・元荒川が合流）に、明治の終わりごろ、州がたまたたり、氾濫を防ぐため堰をもうけたりして、船が通れなくなった。
- ・ 鉄道、自動車を利用されるようになり、昭和の初め頃廃止される。

● 主な河岸場

- ・ 徳利河岸（古利根川） ・ 「徳利貸し」（P10）  
徳利貸し 近くの河岸場で働いている荷揚げ労働者に、浅野家で徳利を貸してお酒を提供したことから、名づけられたと伝わる。
  - ・ この「貸し」は「河岸」の意味であったと思われ、「徳利河岸」が存在していたと思われる。
- ・ 増林河岸（古利根川） ・ 野田への旧往還道あたり（現寿橋下流約50m）にある古利根川の水運河岸の船着場。
  - ・ 明治中期、粕壁からの高瀬舟で、出入りが年間30回、米・麦・3820俵、大小豆148俵の出荷で大変盛んであったという。
  - ・ 現在は埋め立てられ、河岸場の面影はない。
- ・ 瓦管根河岸（元荒川） ・ 古くから越谷周辺の物資を輸送する中心的な河岸場
  - ・ 江戸から明治にかけて、100石積みの大きな船を何艘も備えていたという。
- ・ 藤助河岸（綾瀬川） ・ 江戸時代は綾瀬川で半七河岸（明治の初め衰退）とともに栄え、日光道中の地の利を得た。
  - ・ 明治時代になると、「武陽水陸運輸会社」組織となって越谷や粕壁などの物資を一手に引き受けたが、昭和の初め頃廃止となった。
  - ・ 藤助河岸が長続きしたのは、堰止めが無かったことによる。

晒し業



○ 香取神社の彫刻（晒しの作業風景＝越谷市指定文化財）

- ・ 江戸時代、慶応2年（1866）、東大沢の染物商が浅草の彫刻師に彫ってもらい（一面彫り）、神社に寄進した。
- ・ 明治以降になっても、東京の染物商・呉服商などが香取神社に来て商売繁盛を祈願したという。

● 晒し業とは

- ・ 木綿の布を白くする。
- ・ 布をさらす（白くする）ため、石灰の白い粉を溶かした「アク桶」に生地を浸す。  
↓
- ・ 河原にしかけた「ハリバ」と呼ぶ竹にかけてほす。  
↓
- ・ 川の水に浸してよくすすぐ。  
↓
- ・ 生地を傷めないよう「かげ干し」＝「河原干し」して白くする。（完成）

● 増森の晒し

- ・ 江戸時代から盛んで、ことに明治～大正年間には「増森の晒し」と呼ばれ、晒しの産地として広く知られるようになった。
- ・ 古利根川は当時、曲流していたので河原が広く、晒しの仕事をするのに適していた。
- ・ 関東でも生産高は5本の指にかぞえられ、100反/日も生産する家があった。
- ・ 当時35軒あった農家のほとんどが、副業で晒し業を営んでいた。
- ・ 完成品の「白木綿」は船や馬車で日本橋、越ヶ谷御殿町の会田染工場、越巻の島村染工場などへ売られた。
- ・ 大正13年古利根川の曲流を直流に改修されてから河原が少なくなり、河原干しが出来なくなり、次第に衰退していった。
- ・ ついには最後まで営んでいた富沢家も、昭和16年に廃業し、「増森の晒し」も姿を消していった。



紺 屋

● なぜ染色業が盛んになったか

・・・越谷はかつて「藍染ゆかた」の生産地として知られていた・・・

- ・木綿の栽培、機織や染料の原料となる葉藍の栽培、藍染めの型付けに使う糊（餅米＝越谷は全国的に知られている）の生産が豊かであった。
- ・古利根川、中川、綾瀬川、元荒川など、染め上げた後の清流洗いに適していた。
- ・消費地、江戸へ供給するのに日光道中の街道筋で、立地条件に適していた。
- ・農閑期の余剰労働力が豊富であった。

● 白玉粉と藍玉

- ・白玉粉（型付けの糊） もち米とうち米を混ぜて水に晒したのをひいて作り、寒季に乾かし粉状にしたもの。
- ・藍玉（藍染めの原料） 藍の花（夏、赤い小さな花が穂のように咲く）が開く前に葉を刈り取り、発酵させて玉状にする。

● 越谷の藍染め

- ・埼玉県の染色は、武州正藍染め・熊谷染め・草加本染めの浴衣（ゆかた）があり、越谷は「草加本染め浴衣」の染色地域に属する。

● 「樹齢300年のイチヨウ」と

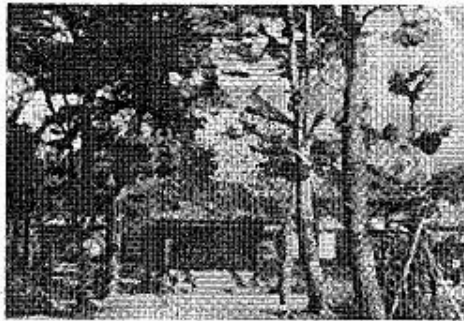
「土手紺屋」

- ・現在、元の会野川に沿った土手に森家の屋敷があり、そこに樹齢300年のイチヨウの木（市指定天然記念物）がそびえている。
- ・森家はかつて会野川の水を利用して紺屋を営んでいた。そのため屋号が「土手紺屋」と呼ばれていた。

紺屋のことわざ

- |           |  |
|-----------|--|
| 「紺屋の白袴」   | ・染物屋でありながら、自分は染めてない袴をはいている。<br>・自分の事をする暇がない。＝「髪結いの乱れ髪」                               |
| 「紺屋のあさって」 | ・染物屋は天候に左右され、仕上がりが延びがちになる。<br>催促するといつも「あさってには出来ます」と言うばかりで、あてにならない。<br>・あてにならない約束を言う。 |
| 「紺屋の地震」   | ・地震の時に紺屋の藍壺が揺れ、壺下の藍が澄まない。<br>「藍＝相」、「澄まない＝済まない」で「相済まない」<br>・「申し訳ない」という意味。             |

# 林 西 寺



- 浄土宗 ・京都知恩院「白龍山月照院林西寺」 徳川氏 (浄土宗) 増上寺  
(天台宗) 寛永寺
- 開山僧 ・鎮西流藤田派の「成阿等海和尚」  
・開山年 不明
- 中興の祖 ・天正12年(1584)第9世住職呑龍上人の供養塔がある。(墓は大光寺)  
・天正19年(1591)寺領25石の朱印地が与えられる。(MAX大聖寺60石)  
この時、別に呑龍上人に25石の学問料が与えられる。

● 朱印状 ・家康をはじめ、歴代将軍の寺領朱印状が多数秘蔵されている。

● 山門 ・柱など一部が最近補修されている。

● 六阿弥陀 ・「越谷六阿弥陀」の「四番札所」の石塔がある。

一番札所	越ヶ谷「天嶽寺」	二番札所	増林「林泉寺」
三番札所	上赤岩「源光寺」	四番札所	平方「林西寺」
五番札所	大泊「安国寺」	六番札所	大松「清浄院」

- ・ 阿弥陀如来を祀る6ヶ所の浄土宗の寺。
- ・ 春・秋の彼岸に巡礼する信仰。(江戸の町でも盛んであった。)
- ・ ひたすら念仏「南無阿弥陀仏(はかり知れない力のある御仏に帰依する。)」を唱えれば誰でも往生できる。(法然)

- 多くの石塔 (15塔)
  - ・ 庚申塔 文字庚申塔 (3塔)  
青面金剛像庚申塔 (1塔 - P9 参照)
  - ・ 標識石塔 新六阿弥陀4番 (1塔)
  - ・ 地藏供養塔 (6塔)
  - ・ 名号塔 (3塔)
  - ・ 呑龍上人墓標の無縫塔 (1塔)



## 呑 龍 (子育て呑龍)

- 生誕 (1556)・武蔵国新方領一ノ割村に井上将監の次男として生まれる。  
井上将監：岩槻城主に仕える。(一ノ割「円福寺」に由緒記あり)
  - 13歳
    - ・仏道に入る。
    - ・隣村平方村の林西寺に引き取られ、幼名龍寿丸を曇流(どんりゅう)と改める。
  - 14歳
    - ・修行の為、江戸増上寺に行き、激しい修行を積む。
  - 29歳
    - ・増上寺管長源譽上人は、学寮の教授を勤めていた曇龍を推挙し、「上人」の号を授ける。
    - ・これを機に林西寺第9世住職となる。 夏・冬・・・増上寺に向  
春・秋・・・林西寺に帰
  - 35歳
    - ・家康から高25石の寺領、曇龍へ25石の学問料が与えられる。  
(この間5つの寺の開山僧・住職を兼帯)
  - 57歳
    - ・上野国新田郡太田村大光院の開山僧となる。  
家康はかねてからの願いで、この地に徳川氏の始祖(=得川氏新田義重)の寺を  
創建することを願っていた。
  - 58歳
    - ・大光院寺領300石与えられる。
    - ・この頃、曇龍は夢の中で悪龍が自分に害を与えようとしたので、この悪龍を一呑みにした。  
これから名を呑龍と改めたという。
  - 61歳
    - ・「鶴の一件」で小諸に逐電し蟄居
  - 65歳
    - ・呑龍の増上寺の師(源譽上人)の遺言を、徳川秀忠が聞き入れ、ご赦免、大光院に帰山。
  - 66歳
    - ・秀忠により多年の衆人の教化・幼児の養育・小諸の蟄居の労苦の慰めとして、天皇より  
紫衣を賜る。
  - 68歳
    - ・没 墓：大光院 供養塔：林西寺
- 
- 鶴の一件
    - ・土地の子供が父の難病を治すため、「鶴の生き血を与えれば、この難病も快癒する」と伝え  
聞き、鶴を密かに捕獲し生き血を与えた。
    - ・家康・秀忠は鷹狩を好み、鷹を使って鶴などを捕らえていたため、鶴を殺す事はご法度で、  
これを犯せば死罪はまぬがれなかった。
    - ・為、その子は発覚され捕手に追われて大光院に駆け入り、命乞いを願った。
    - ・呑龍は「父を思う若者の幸心にうたれ」寺にかくまったが、幕府から出頭命令が出された。
    - ・呑龍は深夜、その若者を連れ寺から抜け出し、小諸の草庵に身を隠した。
    - ・4年後、呑龍の増上寺の師(源譽上人=徳川秀忠が尊崇)が病に倒れ、臨終の席で見舞い  
にきた秀忠に、「なにも思い残す事はない。願わくば呑龍の赦免を願う」と言い残し、呑龍  
は赦免され、秀忠は今までの功績をむしろたたえ、紫衣迄天皇に上申し賜った。
  - 子育て呑龍
    - ・貧しさの為、子供を養育出来ない家々から多くの幼児を預かり、大光院の寮に引き取り育て  
家事が出来るような7~8才になると、家に帰した。

# 庚申塔

● 庚申（こうしん・かのえさる）信仰（庚申講）とは

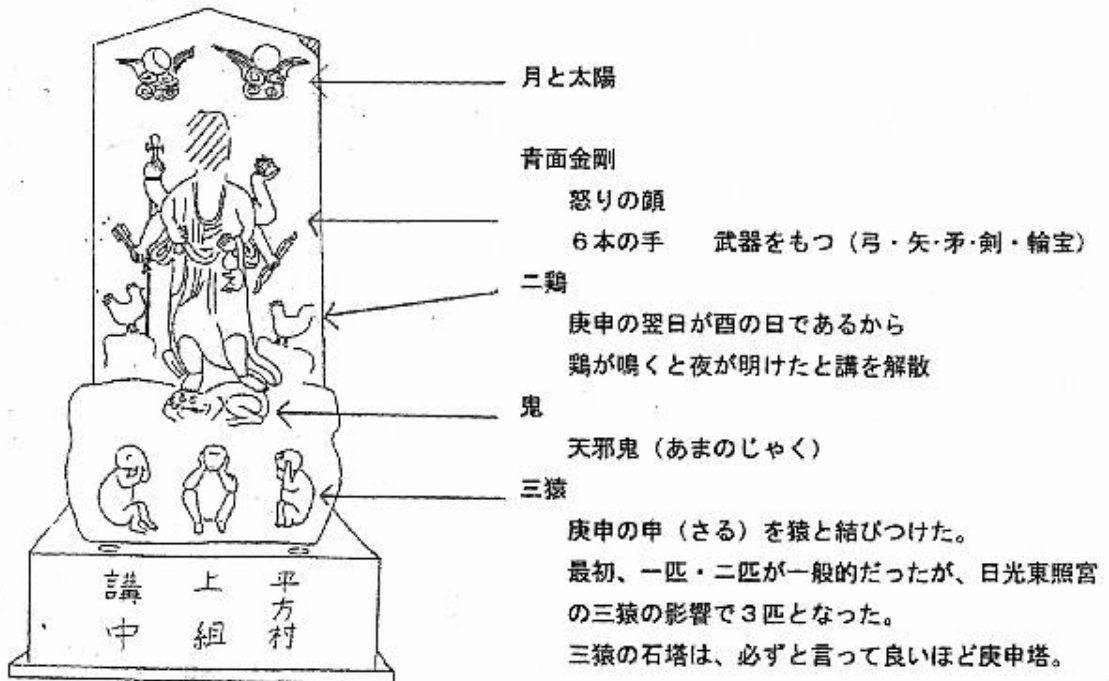
- ・ 道教（中国）の「三尸（さんし）の教え」の影響を受けた信仰。
- ・ 三尸の虫・・・人の腹の中に住むという3匹の虫で、人間の罪を知っている。
- ・ この虫が庚申の日の夜に、人の睡眠中に口から抜け出して天に昇り、その罪を天の神（帝釈天）に暴くと言う。
- ・ それ故、庚申の夜は三尸虫が身体から抜け出る機会を与えないよう、寝てはならないという。
- ・ 従って庚申講の仲間達は、一堂に会し「庚申待ち」という徹夜で過ごす行事が行われる。
- ・ 江戸時代は全国津々浦々で庶民の間で盛んに行われた。
- ・ 明治の廃仏毀釈で急に衰え、庚申塔もほとんど見られなくなった。
- ・ 無病息災・豊かな暮らし等、現世の利益として拝んだ。

● 庚申塔

- ・ 庚申待ちの記念として建立された石塔が庚申塔
- ・ 道端・辻・寺社・個人の敷地内に建てられた。
- ・ 江戸時代は沖縄と種子島を除く、北海道の礼文島から鹿児島島の竹島まで建立された。

● 庚申塔の型式

- ・ 「文字庚申塔」「青面金剛像庚申塔」
- ・ 代表的な庚申塔  
 「日月（じつげつ）」＝（太陽と月）・「青面金剛」・「二鶏」・「三猿」
- ・ 寛文年間（1661-1672）庚申塔が目立ち始める
- ・ 元禄年間（1688-1703）建立大ブーム



月と太陽

青面金剛

怒りの顔

6本の手 武器をもつ（弓・矢・矛・剣・輪宝）

二鶏

庚申の翌日が酉の日であるから  
鶏が鳴くと夜が明けたと講を解散

鬼

天邪鬼（あまのじゃく）

三猿

庚申の申（さる）を猿と結びつけた。

最初、一匹・二匹が一般的だったが、日光東照宮  
の三猿の影響で3匹となった。

三猿の石塔は、必ずと言って良いほど庚申塔。

青面金剛像庚申塔